

『近現代史の教育のための施設』構想

大阪府都市地方戦況会議

「近現代史の教育のための施設」あり方検討会

課題認識

- グローバル化が進む社会では、自国の近現代史をよく知り、きちんと理解することが重要
- とりわけ、評価が分かれる事柄については、それぞれの考え方を知り、国際社会での日本の立ち位置を認識することが必要
- 戦争/紛争については多様な見方があり、悲惨な歴史が繰り返されることのないよう、その実相や背景を学ぶことが重要
- 我が国においては近現代史教育が不十分(近現代史を十分学べる施設がない)

国において設置の動きがない以上、大阪で政治的・先導的に設置

目的

- 子どもたちが世界と日本の関係を多面的に捉えながら日本の近現代史をしっかりと学び
- ・平和を育むかす諸課題(リソース)をどう乗り越えていくかを自ら考えることのできる機会を提供する

メインターゲット

小学校高学年から高校生

※それ以外の年齢層や、府内外・国内外からの利用者も想定

ヒースおおさかの役割

- 大阪が「軍部」の一面を有した
- ・大戦末期の空襲で1万人以上が亡くなり廃墟と化した
- 記憶を次世代に伝え
- 平和の大切さを実感させる場の特化

そして↓

『近現代史の教育のための施設』と役割分担、連携

展示

【基本的考え方】

- 「近代」は明治維新から第二次世界大戦終結まで
- 「現代」は戦後から現在を想定、最新の出来事は開館後もアップデートしていく
- 歴史的な遺物の展示ではなく、歴史の見方を「多面的」「相対的」に示す
 - * 多様な意見を聞き、特定の見方でもって展示しない……来館者自身が見て考える
 - 出来事の羅列ではなく、その背景/原因をしっかりと示す

例えば日本と他国、政府と軍部と民衆

【内容、手法】

- 「参加」体験を重視(ハンズオン)……エデュテインメントの発想
- 映像メディアを駆使……双方向性、コンテンツの可変性
- 外部のメディアライブラリーやアーカイブを活用……映像のみならず、人的資源も
- メインターゲット以外の層、さらに知りたい人のニーズにも応える
- 【例】全周コースとハイライトコース、常設展と特別展、可動性の高い展示法、ライブラリー
- 2種類の専門家(展示資料を収集する人/見せ方を考える人)のキャッチボールで常にアップデートエッジする……継続的な投資が必要
- 歴史という切り口での「回遊性」にも配慮(オンラインコミュニティ的発想)
- 大阪の歴史観光ルートに組み込み

運営を支える仕組み

- 我が国の従来の学芸員(キュレーター)ではなく、教育・普及のノウハウを持つ人(エデュケーター)により来館者のニーズに合わせて多様な教育プログラム、ツール等を準備、提供……学校現場と連携
- 寄附の仕組み(ドネーション)、ボランティアガイド等……市民・市民、企業などとの協働